

明治維新、開国
キリシタン禁制の解除
日本の新たな夜明けへ



聖なる信仰と宣教師の再来
信徒たちのために建てられた新たな教会

天草 復活と教会の献堂
日本 開国・江戸幕府の終焉、そして明治維新へ
世界 アメリカ南北戦争時代

黒船がもたらした近代思想
開国がもたらしたもの

200年以上も鎖国を続けてきた日本が、近代化に開眼したきっかけのひとつが、幕末期に來航した黒船の存在です。1853年、浦賀沖に訪れたペリー率いるアメリカ艦隊は、日本に大きなインパクトを与えました。

翌年、再来日したペリーとの間で「日米和親条約」を締結、1858年には、米・英・仏・露・蘭と修好通商条約を結び、欧米諸国との外交が再開されていきました。西洋の文明や産業、医療などをモデルとして取り入れながら、日本は、それまでにない変化を遂げていくのです。

コラム
「潜伏キリシタン」の多くはカトリックへ独自の信仰を貫く「かくれキリシタン」も

江戸幕府のキリシタン禁教令により、棄教を装ったものの水面下でキリスト教信仰を続けた人々のことを「潜伏キリシタン」と呼びます。彼らの多くは、禁教が解かれたのちに洗礼を受け、カトリックに復帰していきました。

一方で、教会下に入ることを拒み、これまでの教えを守り、宣教師も持たない独自の信仰形態を継続する「かくれキリシタン」と呼ばれる人もいました。先祖代々受け継がれてきた習俗を捨てることに抵抗を覚えた人も多かったのです。

なお、天草地域では昭和30年代まで存在していたとみられます。

大浦天主堂の建立
「信徒発見」と「高札の撤去」

開国によって長崎では、大浦一帯を埋め立てて、外国人居留地がつくられました。幕府は日本人に布教活動を行わないことを前提に、在日外国人のための祈りの場として「大浦天主堂」の建設を容認。1865年に完成した大浦天主堂はその美しさともめざらしから「フランス寺」と呼ばれ、多くの見物客を集めるなど話題を呼びました。

完成から1ヶ月。大浦天主堂に十数人の日本人の姿がありました。そのうちの一人の女性が、祈りを捧げていたフランス人宣教師プティジャンの背後に近づき

「私たちは神父様と同じ心であります」と囁いたので。これが、宗教史上の奇跡の一つと呼ばれる「信徒発見」です。

この出来事は、西洋諸国に驚きと感動をもって伝えられました。また日本は禁教下。告白したキリシタンたちは改宗を強制され、激しい迫害に遭います。しかし、西洋諸国から激しい抗議が相次いだこともあり、明治政府は1873年に禁教の高札を撤去しました。しかし、依然として禁教は続きましたが、多くの人には解禁と映りませんでした。条件付ながら禁教が解かれたのは1889年の大日本帝国憲法まで待たなくてはなりませんでした。

「復活の象徴」として
建てられた2つの教会

禁教が解かれた直後の天草では、布教が進むと同時に、教会堂の建設も行われました。

■大江教会

1892年に來島したフランス人宣教師・ガルニエ神父は82歳でこの地で没するまで、40年間布教に努めました。自らの私財と信者たちからの寄付金や労働奉仕をもとに1933年、多くの教会建築を手掛けた長崎県五島出身の鉄川与助の設計施工により、現在の「大江教会」を建てました。

■崎津教会

崎津では1888年、潜伏キリシタンとして信仰を続けた信者から崎津諏訪神社の隣の土地の寄付を受け、木造の旧崎津教会が建てられました。(現在は跡地)

1934年、木造の教会の老朽化に伴い、現在の崎津教会が完成します。1927年にこの地に赴任したフランス人宣教師・ハルブ神父の依頼により、この教会も鉄川与助が設計施工しました。

禁教期に絵踏が行われた庄屋役宅跡に建てることで、「復活の象徴」としたいという彼の強い想いがあつたといえます。



大江教会



崎津教会



風土に根ざして営まれてきた人の生活や
生業の在り方を表す文化的景観、「崎津・今富」。

「かくれキリシタンゆかりの風習
「白飾り」と「幸木飾り」

今富地区には天草で唯一、かくれキリシタンゆかりの正月飾り「白飾り」を伝承する人がいます。川嶋富登喜さんと、甥の川田富博さんです。川嶋さんは父の代から神道に改宗していますが、祖父の代まではかくれキリシタンの信仰を続けていました。幼い頃に祖父の様子を見ていた川嶋さんは「地域に伝わる歴史や文化を絶やしてはならない」という思いで、祖父が行っていた正月飾りを受け継いでいます。幸木飾りと白飾りは、神道とかくれキリシタンの飾りが融合したものだといわれています。



以前は12月25日の早朝、まだ誰もいない山に入り「聖水」を汲んでいたそうでした。その日には仏壇の線香を焚いてはいけないという決まりもあつたといわれています。

■幸木飾り

正月が近づくとまず行のが「幸木（さいわいき／さわき）飾り」と呼ばれるもの。天井から下り下げたカシの木を中心に、薬葉のついた真竹の先端・モロモク（シグ）・タイダイを飾り、両端に葉月の人參と大根を3本ずつ、白神を巻いた鎌などの農耕具をかけます。幸木は不幸があると木ごとはずして海に流すため、左右に毎年2本ずつ増やしていく縄が、何事もなく家族が安泰に暮らせた年数の証でもあります。

■白飾り

土間に逆さにした白を伏せ、その上に杵と鏡餅とタイダイを飾ります。杵を2本交差させるように並べることで、十字架を表し、ひっくり返した白のなかには、煮しめと白飯をマリア様へのお供えとして隠すのです。

崎津・今富集落について

復活期以降のキリシタン史跡は、天草下島の西海岸に集中しています。深く入り組んだ羊角湾の小さな入江にあるのが、崎津・今富集落です。ふたつの集落を歩いてみると、一年を通じて、多くの民家の軒先で注連縄（しめなわ）を見ることが出来ます。これは、天草下島の多くの地域で見られる光景で、キリシタンだと疑われないための禁教下の工夫とされ、独特の景観となっています。

古くから、漁業が盛んな崎津に対し、今富は農林業が盛んでしたので、隣り合うこの2つの集落では、互いの産物を分け合いながら



カケ

暮らしていました。その一例が、崎津の海に面した家々でよく見られる海上テラス風の「カケ」です。今富でとれた竹やシュロでつくられており、現在も漁網の補修や、魚介や海藻を干す作業場として使われています。

集落の信仰と
生業を支えた神父道

土地の狭かった崎津には、密集した民家の間に細い通路がつくられました。これを「トウヤ」といいます。そして、車もなかった時代、ガ

ルニエ神父が、大江教会と崎津教会とを往復する際に使った「神父道」と呼ばれる峠道が今も残されています。崎津・今富・大江・高浜集落にまたがる、矢筈岳（やはずだけ）を越えるルートで、崎津の「メゴイナイ」と呼ばれる生活物資の行商もこの道を使っていました。

これらの道では、生業だけでなく文物の交流も行われており、崎津は中世以来の海路の要衝、今富は陸路における交通の要衝であったことがわかります。



トウヤ

関連施設紹介

SPOT



大江教会

ロマネスク様式の白亜の建物で、堂内には外海の出津教会のド・ロ神父による5枚の「ド・ロ版画」も。

住 天草市天草町大江1782
☎ 0969-22-2243 (天草宝島観光協会)
営 9:00~17:00 (日曜はミサのため、午後からの開館)
休 なし (教会の事情により、臨時休館する場合あり)



崎津教会

禁教期に絵踏が行われた庄屋役宅跡に建てられており、「復活の象徴」でもあります。

住 天草市河浦町崎津539
☎ 095-823-7650
(長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産インフォメーションセンター)
※教会の見学にはインフォメーションセンターへの事前連絡が必要です。
営 9:00~17:00 (日曜はミサのため、開館時間は9時半~)
休 なし (教会行事開催時は入館不可)



崎津集落ガイドセンター

崎津・今富集落の歴史的・文化的価値を学ぶことができます。界隈の観光ガイドなども入手できます。

住 天草市河浦町崎津1117-10
☎ 0969-78-6000
営 9:00~17:30 休 12/30~1/1



崎津資料館みなど屋

崎津教会そばにある資料館。潜伏キリシタン期の信心具などが展示されています。

住 天草市河浦町崎津463
☎ 0969-75-9911
営 9:00~17:00 (最終入館16:30) 休 12/30~1/1